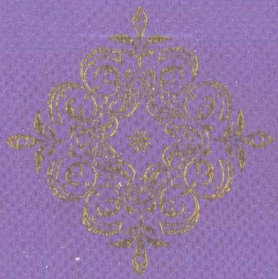

A TREASURY OF JAPANESE POETRY

# 日本の詩歌

11

釈　迢空
会津八一
窪田空穂
土岐善麿

中央公論社

日本の詩歌　11
©1969

釈　迢空
会津八一
窪田空穂
土岐善麿

昭和44年 1 月 5 日初版印刷
昭和44年 1 月 15 日初版発行

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷　凸版印刷株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　小泉製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

# 目次

釈迢空
海やまのあひだ　9
春のことぶれ　19
水の上　38
遠やまひこ　44
天地に宣る　55
倭をぐな　62
古代感愛集　76
近代悲傷集　86
現代襤褸集　96

会津八一 103
鹿鳴集 146
山光集 165
寒燈集 186
寒燈集以後

窪田空穂
まひる野 191
明暗 196
青みゆく空 198
濁れる川 201

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbo

鳥聲集 206
泉のほとり 211
土を眺めて 214
朴の葉 221
青水沫 224
鏡　葉 227
青朽葉 237
さざれ水 240
郷　愁 246
冬日ざし 250
明　闇 254
冬木原 257

卓上の灯 263
丘陵地 267
老槻の下 270
木草と共に 273
去年の雪 277
清明の節 281

土岐善麿

黄昏に 287
不平なく 298
佇みて 303
街上不平 308

雑音の中　313
緑の地平　316
緑の斜面　319
空を仰ぐ　321
初夏作品　324
作品1　328
作品2　近詠　332
六月　336
周邊　340
秋晴　342
夏草　344
冬凪　348

春野 350
遠隣集 353
早稲田抄 358
歴史の中の生活者 360
相聞抄 365
額田抄 367
四月抄 369
若葉抄 372
連山抄 375
東西抄 378
詩人の肖像 山本健吉
鑑賞 加藤守雄
年譜 窪田章一郎

釈

迢

空

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbo

# 海やまのあひだ

## 島山

葛の花　踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり
谷々に、家居ちりぼひ　ひそけさよ。山の木の間に息づく。われは
山岸に、昼を　地虫の鳴き満ちて、このしづけさに　身はつかれたり
山の際の空ひた曇る　さびしさよ。四方の木むらは　音たえにけり
わがあとに　歩みゆるべずつゞき来る子にもの言へば、恥ぢてこたへず
ひとりある心ゆるびに、島山のさやけきに向きて、息つきにけり

『海やまのあひだ』は、大正十四年改造社から出版された。迢空二十九歳、処女歌集である。逆年順に編集されていて、大正十四年から明治三十七年まで、六百九十一首の歌を収めている。昭和四年に改造文庫の一篇として再刊、語句に多少の修正が加えられた。本巻の歌は後者によった。

「島山」の連作は、後年の自注によると、その原形の出来たのは大正十年の壱岐旅行中だという。しかし、初め雑誌『日光』に発表した時の標題は「奥能野」となっており、今いずれとも定めがたい。迢空は、いったん胸に刻みつけた印象を、十年二十年後にも、まざまざと想起する異常な能力の持ち主であったから、これらの歌にも、幾つものイメージが重畳しているのであろう。

「葛の花」の歌は、迢空の代表作

もの言はぬ日かさなれり。稀に言ふことばつたなく　足らふ心

いきどほる心すべなし。手にすゑて、蟹のはさみを　もぎはなちたり

沢の道に、こゝだ逃げ散る蟹のむれ　踏みつぶしつゝ、心むなしもよ

いまだ　わが　ものに寂しむさがやまず。沖の小島にひとり遊びて

ゆくりなく訪ひしわれゆゑ、山の家の雛の親鳥は、くびられにけむ

雞の子の　ひろき屋庭に出でゐるが、夕焼けどきを過ぎて　さびしも

蜑の村

網曳きする村を見おろす阪のうへ　にぎはしくして、さびしくありけり

磯村へますぐにさがる　山みちに、心ひもじく　波の色を見つ

蜑をのこ　あびき張る脚すね長に、あかき褌高く、ゆひ固めたり

行きずりの旅と、われ思ふ。蜑びとの素肌のにほひ　まさびしくあり

として名高い。道の上に葛の花房が踏みにじられている。土ににじんだ紫色の鮮かさ。それに目を触れたみずみずしい感覚が、ついさっき誰かがこの山道を通り過ぎたのだという深い嘆息を誘い出す。ここにも幽かな生が営まれていることを発見した驚きだ。「葛の花が踏みしだかれてゐたことを原因として、山道を行つた人を推理してゐる訣ではない」（『自歌自註』）と作者が断っているのは、この歌を鑑賞する上での要点。

「蜑の村」、同じく壱岐島での作。渡良村の小崎あたりでの瞬目であろう。

「蜑をのこ」の歌について、土岐善麿は「第二句第三句の表現は太古の生活を想像せしめる」（『歌と人』）と言っている。南海の太陽に反射する褐色の肌、青い波、赤い褌、そうした原色の交錯が、素朴な律動を伝えて来る。しかも、

蜑の子や　あかきそびらの盛り肉の、もり膨れつゝ、舟漕ぎにけり

蜑をのこのふるまひ見れば　さびしさよ。脛長々と　砂のうへに居り

船べりに浮きて息づく　蜑が子の青き瞳は、われを見にけり

気多川

きはまりて　ものさびしき時すぎて、麦うらしひとつ　鳴き出でにけり

麦うらしの声　ひさしくなきつげり。ひとつところの、をぐらくなれり

むぎうらし　ひとつ鳴き居し声たえて、ふたゝびは鳴かず。山の寂けさ

ふるき人　みなから我をそむきけむ　身のさびしさよ。むぎうらし鳴く

山中に今日はあひたる　唯ひとりの　をみな　やつれて居たりけるかも

夜

啼き倦みて　声やめぬらし。鴉の止へる木は、おぼろになれり

音を消したフィルムを見るような寂莫を感じるのは、「行きずりの旅」という思いが、作者から離れぬからだ。遠景から次第に近景へ視野を移していて、写実であると同時に、孤独な作者の心象風景でもある。

大正九年の夏、迢空は信州・遠州・三河の国境を山深くわけ入って、民俗採集のための苦しい旅をした。「気多川」および次の「本地屋の家」「供養塔」「遠州奥領家」等の連作は、その折の収穫。気多川は天竜川の支流で、秋葉山の西を流れている。

「麦うらしは、早蟬。鳴いて、麦にみを入れる、と言ふ考へからの名」（原注）

連作について、迢空は次のように言っている。「連作は、一首一首は、出来るだけ、既に表れた歌

山の霧いや明りつゝ　鴉の　唯ひと声は、大きかりけり

鴉棲る梢　わかれずなりにけり。山の夜霧はあかるけれども

山中は　月のおも昏くなりにけり。四方のいきもの　絶えにけらしも

木地屋の家

うちわたす　大茅原となりにけり。茅の葉光る暑き風かも

鳥の声　遙かなるかも。山腹の午後の日ざしは、旅を倦ましむ

高く来て、音なき霧のうごき見つ。木むらにひゞく　われのしはぶき

沢なかの木地屋の家にゆくわれの　ひそけき歩みは　誰知らめやも

山々をわたりて、人は老いにけり。山のさびしさを　われに聞かせつ

山びとは、轆轤ひきつゝあやしまず。わがつく息の　大きと息を

沢蟹をもてあそぶ子に、銭くれて、赤きたなそこを　我は見にけり

の上の材料が、他へたち渡らぬやうにするのが本道である。さういふ風にして、段々先へ境遇を移し、興味を移動させてゆくのである」（「自歌自註」）。だから、「夜」の場合も、一首目では鴉の止っている木が朦朧として来たことだけ言って、霧のことは言っていない。次の歌に残してあるのだ。

以上、大正十三年の発表。

木地屋は、ロクロを使って、椀や盆など漆器の木地を作るのを職業としている。近江の愛知川上流の君ヶ畑に木拠地があって、全国に散在する木地屋の戸籍を管理している。彼らは材料にする木が近くになくなれば、山谷を渡ってどこへでも移って行く。一生の大方を山中に送るので、里人と交わることも少かった。そういう木地屋の習俗を調査しようとして、迢空は道すらないような奥山家まで訪ね入った。

戻るとき、よびとめて手にくれたのは、木ぼっこであつた。木地屋でなくてはつくりさうもない、如何にもでゝいな、親しみのある、童子（ボッコ）といふ名のふさはしい人形である。

木ぼっこの目鼻を見れば、けうとさよ。すべなき時に、わが笑ひたり

供養塔

数多い馬塚の中に、ま新しい馬頭観音の石塔婆の立つてゐるのは、あはれである。又殆、峠毎に、旅死（ヌスビト）にの墓がある。中には、業病の姿を家から隠して、死ぬるまでの旅に出た人のなどもある。

人も　馬も　道ゆきつかれ死にゝけり。旅寝かさなるほどの　かそけさ

道に死ぬる馬は、仏となりにけり。行きとゞまらむ旅ならなくに

邑山（ムラヤマ）の松の木（コ）むらに、日はあたり　ひそけきかもよ。旅びとの墓

ひそかなる心をもりて　をはりけむ。命のきはに、言ふこともなく

ゆきつきて　道にたふるゝ生き物のかそけき墓は、草つゝみたり

遠州奥領家

これらの歌について、北原白秋は、「尋常人の鍛錬によって得られぬある本質の『眼』や『五体』がむしろ不気味なほどに底から光って響いて来る」と言い、もしこういう旅人に山中で行き逢ったら、「明るい昼の日射しの下ではあっても、冷々とした黒い毛ごろもの気色や初めて触れて来るたましいの圧迫を感じずには、すれちがえない或るものがあろう」（「黒衣の旅びと」）と言っている。

「人も馬も」の歌、長い旅寝を重ねる間の極度の心しずもりを、「かそけさ」という語で表わしている。漂泊の中に命を終った人々の悲しみが、感受性の鋭くなった自分の心に痛切に沁み入る感じを言ったのだ。

「邑山の」の歌、村近い山の松の木立ちの奥にある旅人の墓、そこへ日が深くさし込んでいる。その静かで遥かな感じを、「ひそけき

山ぐちの桜昏れつゝ　ほの白き道の空には、鳴く鳥も棲ず

燈ともさぬ村を行きたり。山かげの道のあかりは、月あるらしも

山のうへに、かそけく人は住みにけり。道くだり来る心はなごめり

ほがらなる心の人にあひにけり。うやゝしさの　息をつきたり

山なかに、悸りつゝ　はかなさよ。遂げむ世知らず　ひとりをもれば

山深く　われは来にけり。山深き木々のとよみは、音やみにけり

軽　塵

人ごとのあわたゞしさよ。閭より立ちうつり行く　ほこりさびしも

庭土に、桜の蕋のはらゝなり。日なか　さびしきあらしのとよみ

もの言ひの　いきどほろしき隣びとの家うごくもよ。あらしに見れば

をとめの島　―琉球―

かもよ」と言っている。「ひそけし」「かそけし」はともに、迢空独得の表現で、幽寂な旅の哀感を表わすことば。以上、大正十二年の発表。

奥領家は、天竜川沿いの山村の旧名、いま水窪町。信州境の青崩れの直下に、こんな小在所があるかと思われるほど、清らかな人居であった、と作者は回想している。「山のうへに」「ほがらなる」の二首、辺境に住む人の謙遜な態度や表情の中に、迢空はしばしば、古代人に通じる思いの深さ、美しさを発見した。そして、孤独な魂が慰められるのを感じた。「軽塵」の三首には、人事忽忙として思い沁みる暇もない、都会生活のいらだたしさが歌われている。以上、発表は大正十一年。

琉球へは三度渡っている。これは第一回の大正十年夏の旅行。国



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbo